

— 熔 鋳 炉 育 て の 親 —

田 中 熊 吉 翁

八幡製鉄所宿老田中熊吉氏は今春多年の功績により労働大臣より黄綬褒章を授与された。氏は八幡製鉄最初の熔鋳炉の火入より今日迄 54 年の長きに亘つて熔鋳炉と共に生き、熔鋳炉を愛し而も部下を慈しみ、自然の花木をめでて 81 才の今日尙健在で勞務に従事されている。我が国の製鉄業が今日あるは氏の現場における精進の賜物と云つても過言でない。黄綬褒章を授けられたことはゆえなきにあらず実に国宝的存在である。

宿老は我国熔鋳炉の育ての親で、明治 17 年 3 月佐賀県三養基郡南茂安村坂口尋常小学校を卒業、兵役を終つて、25 才頃(明治 29 年頃) 日給 27 銭で小倉で働いていた。その当時は米 1 升 5 銭の時代で、小倉では 2 年ばかり働らいて八幡に行くようになった。しばらくは歩いて通つたが後に月 25 銭で部屋を借りて住むようになった。そして製罐仕事をして 1 日 80~100 銭位になつていたのである。そうしているうち服部技監が八幡製鉄所に勤めるようにすゝめたので熔鋳職として入所したのである。それは明治 34 年 2 月 5 日官営製鉄所第 1 熔鋳炉に世紀の処女火が点ぜられた直後であつた。以来今日まで 54 年間熔鋳炉と共に暮して来られたのは全く驚くべき貴い業績である。現在職場で働らいている者としては日本で最年長者と思われる。恐らく世界でも珍らしいことゝ思う。

然し宿老はよく話して居られた、"ブオトランというフランス人は 14 才から 94 才まで元気で働いた職場人(鑄物屋さん)であつて、私はそれに比べるとまだ 25 年も足りないです"と。こうした所に宿老の若々しき元気がうかゞわれるのである。また職場で若い人に"年令のことを考えてはいけません。自分は年をとつたなんて考えては駄目です。いつも人間は若々しい気持でなければいけません"と話されたものである。本当に元気な方でよく働かれる。じつと見ていて感心する。昭和 22 年 2 月洞岡の現場を共にした当時、現場の混乱状態は今から想像もつかぬほどのものであつた。当時しばらく筆者は早出をして黙々と努力したものであるが熔鋳炉を一巡して事務所に 7 時頃着くと宿老はもう来られている。殆んど毎日そうであつた。あの寒いのに朝 6 時半にはもう電車にのつて出掛けて居られたのであつた。現在では多少ゆつくり出勤される様になつたがそれでも 8 時には門をくゞられるのである。

又 3 年ばかり前、宿老が子供同様に育てた人が年満で退職された時"まだ気をゆるめては駄目だ。毎日出勤すると思つて早起せねば体が駄目になる。私の年まで働くには 25 年ある"と元気づけられるのを聞いて成程と思つたものである。こうした健康を維持するについて宿老は年と共に自分の体に注意されている。早寝早起は必ず実行されている。酒も煙草も恨んでおられる。煙草も殆んどまれないが大抵ポケットに持つている。そして職場で若い人が疲れた時など"まあブク"と勤めるのである。長年熔鋳炉と共に暮して来ただけあつて夏の高熱作業についてよく若い人に注意して下さる。塩分と汗との関係などは実に科学的に説明されるのである。こうした工合で熔鋳炉操業に対しても自己の健康法を以つてのぞんで居られるのがよく分る。日本の熔鋳炉も宿老にあやかつて今少し一代の寿命を長くしたいものである。

現在我国の熔鋳炉はいずれも世界最高水準の操業を続けているが、その創業時代は殆んど皆宿老の愛と指導で育てられたものである。また満州、朝鮮にも出かけておられるのである。創業の難を打開する為、明治 45 年 6 月から 1 年 4 ヶ月、熔鋳炉作業の技術習得の目的でドイツ G.H.H. Oberhausen 製鉄所に出張されたことは周知のことである。今春黄綬褒章を授与されたが誠にめでたいことである。その帰途熱海に立寄り俵老先生を訪ね一夕楽しい談笑のうちに過ごされたことは本当にゆかしいことである。

終りに宿老の健康と幸福を祈りペンを置く。(文中若干記憶に誤あるかも知れません。お許しを乞ふ。八幡製鉄本社辻畑敬治)



俵先生(83才、向つて右)と語る田中宿老(81才)。